

インクルーシブな学校の核となる特別支援教育担当教員 研修システムの試行(2)

オンデマンド型講義「通常の学校で行う特別支援教育とインクルージョン」の成果と改善点に関する検討

〇区 潔萍

米田 宏樹

（筑波大学人間系・人間総合科学研究科）（筑波大学人間系）

KEY WORDS: インクルーシブ教育 特別支援教育教員研修 通級指導教室

I. 問題の所在と目的

2017 年・2018 年の学習指導要領の改訂並びに 2018 年度より開始された高等学校における通級による指導の制度化によって、通級担当教員の現職養成研修の必要性は、急務の課題となっている。通常の学校や通常学級における特別支援教育の専門性を高めることや、現職教員に対する特別支援教育に関する研修の充実が重要と考えられている（福田ら、2021）が、特別支援教育における効果的な現職研修の方法は、未だ確立されていない。本研究は特別支援教育担当教員を対象としたオンデマンド講義（10 講義）と個別の指導計画作成に関するオンライン OJT 研修を探索的に実施し、研修のあり方を検討することを目的にしている。本報告は、オンデマンド講義研修のうち「通常の学校で行う特別支援教育とインクルージョン」の講義の成果と改善点を検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象：A 教育委員会と連携し、教育機関向け GSuite の Classroom を利用し、オンデマンド型講義受講による研修を実施した。受講生は、A 教育委員会から推薦された通級指導教室担当教員 18 名（小学校 13 名、中学校 3 名、高校 2 名）であった。受講生には、予習として受講前アンケートと、復習として受講後アンケートへの Form による回答が求められた。テーマが「通常の学校で行う特別支援教育とインクルージョン」の講義研修に対して、受講生による受講前と受講後に回答したアンケートの記述内容を用いて分析を行った。（筑波大学人間系研究倫理委員会承認：筑 2020-103A）。

2. 分析手続き：受講前と受講後アンケートで得られた回答から、無回答や意味不明な回答を除去し、分析対象となった回答内容を表すキーワード的なメモをラベルとして付与した。その際、複数のラベルに当てはまると判断された場合は複数に付与した。文中の（数字）は当該ラベルの回答件数である。

III. 結果

1. 受講前のアンケート回答

受講生の既知のこと（37）として、インクルーシブ教育（6）の理念は、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒が同じ場で共に学ぶ（12）ことを追求し、そのために、連続性のある「多様な学びの場」（1）において、基礎的環境整備（1）や合理的配慮（5）の提供が重要であるとの認識があった。さらに、児童生徒の実態・ニーズに合った指導（5）を提供するために、ユニバーサルデザイン（1）の授業を実施し、個別の指導計画（1）を作成することが必要である。また、障害のある児童への理解促進（1）の重要性は理解しているものもあったが、具体的な理解促進の方法（3）は知られていなかった。

他に、知りたいこと（27）に関しては、特定な障害に対する具体的な支援方法（9）が一番多く挙げられた。それに関連して、インクルーシブ教育のアプローチ（3）やインクルージョンの具体的な内容（3）、特別支援教育のあり方（4）、そして通常学級での学級づくり（3）の方法は多くの受講生の知りたい内容とみられた。そして、知りたい内容（9 項目のうち 8 項目）は、多くの受講生にとって困っている（21）と感じたことでもある。さらに、特別支援教育コーディネータ等との役割分担（1）や家庭との連携の困難さ（1）も挙げられた。児童の実態把握が困難（1）である一方、通常学級での指導効果の般化（3）や学習効果の定着の困難さ（1）もみられた。

保護者や教員、児童生徒が障害への理解促進（3）と、学級づくり（1）の方法に困っている様子が見られた。

2. 受講後のアンケート回答

受講生のわかったこと・解決したこと（72）を合わせて、受講前の既知のことに比べると、インクルーシブ教育の理念（14）や就学先決定（4）の仕組み、学びの場の連続性（8）に対する認識が増大した。また、特別支援教育の対象が増えていく中で、教育的ニーズが拡大（3）し、通級（担当指導者）の役割（8）が重要となり、ユニバーサルデザイン（3）の視点で、環境調整（4）を行うなど、学校全体の支援（5）の取り組みに対して新たな認識が得られた。さらに、受講前に「知りたい」や「困っている」の項目のうち、受講後に「解決した」と回答したものが他にもある。例えば、特別支援教育の考え方（1）や学級づくり（2）、そして障害への理解促進（1）の方法を知ることができた。また、自立活動の内容（2）と合理的配慮（2）の考え方、個々の児童の実態に合った指導形態（2）の重要性に関する理解が深まったとみられた。

しかし、受講後にまだわからなかったこと・解決しなかったこと・新たに生じた疑問（24）として、それぞれの困難さを抱えている児童生徒に対する具体的な支援方法（4）や合理的配慮（3）の提供方法と範囲が挙げられた。そして学びの場の連続性（2）を理解しつつも、実際に就学先を決定（2）する際に困難さを感じていた。通常学級との温度差（1）がある中で、障害への理解促進（3）のあり方にも疑問を抱えていた。そして、人員・リソース不足（2）という現状の中で、有効な連携支援ツール（2）とその作成方法を求める受講生もいた。

IV. 考察

通常の学校における特別支援教育が制度的に充実してきたことで、通常学校の教員にとって特別支援教育の関連概念も身近なものとなってきた。しかし、そういった概念の具体的な内容や教育現場での実施方法に関してまだ認識が不十分なところもある。そのため、通常学校でのインクルーシブ教育のアプローチ、特別なニーズや配慮が必要とする児童生徒への具体的な支援方法に多く関心が集まった。

受講生は講義研修を通じて、インクルーシブ教育の理念や関連の概念、通常学校での指導の重要性に対する理解が深まったとみられる。また、実際の指導方法としては、ユニバーサルデザインの授業や環境調整を通じて、学びやすい授業デザインと学級づくりに加え、個々の実態に応じた個別の指導計画を作成し、学校全体で支援に取り組むことの重要性を改めて認識した。

講義研修後に、特定の困難さを抱えている児童生徒に対する具体的な支援方法、そして合理的配慮を提供する際の手立てや、周囲の理解を得ることに関してまだ疑問が残されていた。これらの課題に対しては、対応する内容の講義研修に加え、OJT 研修等における事例検討を行う必要があると考えられた。具体的な支援事例を取り上げて議論を行い、意見交換を重ねていくことで、実際の指導や支援場面における試みと留意点が理解できるのではないかと考えられた。

引用文献：福田ら：特別支援教育における教師の研修ニーズと専門性向上に関する調査報告-特別支援学校、通級指導教室を対象として-、東京学芸大学紀要，72，541-551，2021。【付記：JSPS 科研費 20K20805；A 自治体プロジェクト研究の助成を受けた】（Jieping OU；Hiroki YONEDA）